無関係

河野多恵子

無関係　定価一二〇〇円
昭和四十九年四月三十日初版印刷
昭和四十九年五月十日初版発行
著者　河野多恵子
発行者　高梨茂
印刷所　三陽社
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四
©一九七四　検印廃止

無
関
係

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

寺尾比佐子は後悔していた。彼女は生まれて以来の二十二年間、こういう鋭い後悔はまだしたことはなかった。彼女はそれを顧みるたびに、ひとが機会を逃がす成りゆきの見本としてこれ以上のものはなさそうな気がした。

それは、全く思いがけない機会でありすぎた。だから、彼女は捕え損ねたのかもしれなかった。捕え損ねたのは、一瞬の成りゆきだったように思われる。しかし、その一瞬以上に彼女に悔まれてならないのは、その機会がまだ引き戻すことのできる手近なところで憩うていたであろう、その間、その場所で、自分がそれに気づかず、雑談していたことであった。彼女は、泥鰌の飼育法なぞ聞いていたのである。

――東京の街中の高層住宅で、泥鰌が飼われているという。

ある日曜日の夕方、妻が煮立った鍋へさして、一団になって動きまわっている、笊の泥鰌を投げ込もうとしていた。片方の手には、投げ込むなり閉じるべき蓋まで構えていた。そこへ、夫が

立ち寄った。ふと思いついて、十匹ほど救ったのである。
助からなかったほうの泥鰌たちは、妻がすかさず閉じ押えた金属蓋を狂い猛って打ち叩いたが、忽ち怯(ひる)み、煮立つ湯音に交って二、三の跳ねる音を残して、一斉に静かになった。ガスの火と鍋の煮える音だけが、はっきりする。
「運の強い奴等だな」
夫は水を入れたボールの中の、自分が助けた泥鰌たちを祝福して言った。折柄、南方の島で戦死するしかなかった一団の兵士のなかで、ただ一人生き残り、生き続けていた旧日本兵が発見されて、広く話題になっていた。
「彼みたいなものだな」
夫がその旧日本兵に泥鰌たちを見立てたので、妻も言うのだった。
「じゃあ、この子たちも生き永らえて、故郷の――故郷の川か、田圃かしらないけれど、いつかは故郷へ帰って行く」
「そういうことになるかもしれん。――さ、どこで飼おう」
「魚屋さんの桶のように深くなければいけないでしょう」
その家には、深い桶はなかった。深い大壺ならあった。外国製品で、肩が張っている。波目のような凹凸が斜めに流れるように胴を巻き、それが半透明のエメラルド色のガラスを生かしていた。泥鰌の棲家には過ぎるが、見た眼ほど高価な物でもない。その大壺に、肩のところまで水を

入れて、泥鰌どもを移してやると、彼等の動静が周囲から全貌見て取れるのであった。
水底で、鎮まっているものもあった。が、水面まで突きのぼろうとする元気のよいのもあった。ただ、水が深すぎるせいなのか、突き進むのに、途中で一、二度ひと息入れ、滑り落ちかけては又、突き進む。それを幾度か繰り返すと、今度は滑り落ちかけたまま水底へ落ちてしまい、当分休憩、と言っているみたいに静かになる。そのうち、静かにしていた別のが突きのぼりはじめる。
夫はそれを部屋に据え、傍に寝そべって、いつまでも面白がって見ていた。妻も台所から、時時見に行った。壺に波目のような凹凸が斜めに流れているせいか、泥鰌どもは水面さして突き進むにも、途中で滑り落ちるにも、えらく斜めに身をあしらう。それで腰を痛めたのか、翌朝水を替えてやろうとすると、尾骨のところの曲っているのが一匹ある。消毒剤の強い水道の水に晒されたのか、いずれも色が薄くなったようにも思える。どうせ、永いことはあるまいと話していたが、四、五日経っても、弱ってゆくものさえ一匹もない。色も別段、薄れてゆくようではなかった。
それで、本式に飼うことになった。餌に鰹節の粉をやり、チーズの破片(かけら)をやり、割いた煮干をやった。チーズがいちばん好きらしかった。で、チーズばかりをあてがったが、そうすると水がひどく濁る。必ず毎日替えてやらねばならない。澄みきった水に入れ直すと、泥鰌どもは余程気持がいいのか、方向も択ばぬほど非常な勢いで跳ね泳ぐ。
しかし、毎日水を取り替えるには、深くて、重くて、ガラス製のその壺は不便だった。扱い損

ねて割ってしまうようなことになりそうである。
代りに、合成樹脂製の真白い角バケツに棲まわせることになった。ついでに、釉（うわぐすり）のかかった青磁色の植木鉢を横にして沈めてやった。泥鰌どもは憩う時、その植木鉢の蔭や横洞をよく重宝した。横洞の屋根で、いつまでも横向きになっているのもあり、臨終かと思って指先で構おうとすると、途端にくるりと向きを変えて泳ぎ去る。そんな恰好をして遊んでいただけのことらしかった。——
比佐子は、その話をありふれた知り合いのひとりである、尾形隆から聞いた。東京駅から乗り合わせた、電車の中でのことである。同級生だという、彼の連れも一緒であった。彼等のおかげで、彼女だけは腰かけることができた。
電車が途中の駅に着き、客の乗り降りが終りかけた時、急に席から起（た）ちあがった、おばさんがいる。傍の女の子を引っ立てて戸口を目指したが、「おっことしちゃった」と女の子が泣きだした。床に水が溢れていた。そこに透明袋が浸っており、別に金魚が跳ねている。それを素早く手で押え、「一匹だけ？」と訊く青年がある。が、おばさんは、「きんぎょ！　きんぎょ！」と泣く子をベルの鳴っているホームへ強引に連れだしながら、「水こぼしちゃったのに、持って行けるわけないでしょ」と言う。失笑があった。「変ってるな。水ならホームにあるのにさ」と少し離れたところで言う者があって、またあちこちで失笑があった。青年が、掌中に納めた金魚を水の垂れる透明袋に入れてホームへ差しだした。と、おばさんはその瞬間に金魚の袋が扉に挟まれる

のを恐れるように、途端に手を引っ込めるような受け取り方をする。
「ああいうおばさんにかかると、かなわないな」
電車が動き出すと、尾形の連れが彼に言った。確かに、おばさんの言動にはひとの親切を拒否するようなところがあった。余程、勝気なひとなのだろう。が、どうしても乗り越すわけにはゆかなくて金魚を諦めさせようと思った瞬間、「一匹だけ?」などと問われた狼狽で、つい妙な言葉を発したのかもしれなかった。降り損ねかけたうえ、子供にそんな失策をさせてしまった恥ずかしさで、一刻も早く立ち去りたかったということだってあり得る。
比佐子はちょっとそう思ったが、相手は会ったばかりのひとである。また立っているそのひとへ腰かけている自分が下から言いかけるほどのことでもない。黙っていると、連れの言葉にさりげなく頷いたあと、濡れた床を見やったりしていた尾形が、上で言うのだった。
「ぼくの姉のところじゃあ、泥鰌を飼っているんだよ」
比佐子は、尾形の姉とも少し知り合いである。彼女の夫にも、一度は会っている。そのためでもあるのだろう。尾形は姉夫婦の飼っている、その泥鰌の話を半ばは比佐子にも振舞うように、折々上から彼女へ向けて聞かせたりしたのである。
それから、一月ほどして、ふたりは盛り場で出会った。比佐子は尾形の知らない女性の連れがあり、尾形も比佐子の知らない女性の連れがあった。
「よく会いますね」と尾形。

「そうですね」と比佐子。
そして双方、笑っただけで別れた。
一両日後、比佐子のやはりありふれた知り合いの家が、火事で類焼した。かなり大きな火事で、比佐子はそのことを夕刊で知った。勤務先から家へ帰った後でのことであったが、時刻が早かったから行ってみた。
彼女が見舞いのあと、幾軒分かの焼跡も眺め終えて、引き揚げようとすると、焼跡の一方に尾形がいる。自転車を従えていた。
「昨夜も来たんだよ。ものすごく燃えていたな」
比佐子が傍へ行くと、尾形は言った。が、焼けたどの家も、彼の知り合いではないそうである。彼の家からは距離もかなりある。が、彼女が物好きだと言うまえに、彼は言った。
「生まれてはじめて、本物の火事を見たのだから」
そういえば、彼女もまだ本物の火事——いや、どんな火事も見たことはない。彼女はそれを言う。
「火事って、だんだん見られなくなると思うんだ。そうなっているんだよ」
と尾形は答えた。「ことに、クラシックな火事らしいやつはね。コンクリートの高層住宅ばかりになってゆくから。見ておくなら、きみも今のうちだよ」
相手が尾形であり、そしてコンクリートの高層住宅という言葉が出たせいだろうか。自転車を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

押しながら尾形が一緒に歩きだし、やがて通りかかった店で休むことになると、そこで比佐子がふと口にしたのは、尾形の姉夫婦が街中の高層住宅で飼っているという、泥鰌の安否のことであった。

――毎朝、夫は食事をする時、自分の食べるチーズの端を小さく齧って、それを泥鰌のバケツへ入れていた。

「太ってきたよ。余っ程、チーズが合うんだな」

と彼は言ったりした。

しかし、十二匹の泥鰌のなかには、死ぬものが出はじめた。小さなのが、死ぬのだった。植木鉢の横洞の屋根でじっと動かず、それも遊んでいるのかと思っていると、本当に臨終だったりする。突っついてみると、横向きのまま鈍い動きで屋根を離れ、逃げるというよりも大儀な軀をもて扱いかねるような感じで沈んでゆく。次に様子を看ると、まるで回復したかのように水の中程で動いているが、元気な連中の邪魔になって突き当られているだけなのだ。掬いあげても、動かない。で、捨てると、身をくねらせ、続けて二、三度くねらせる。しかし、水に戻してやっても、大抵まる一日とは生き延びずに、死んでしまう。尻尾の曲っているのは死ななかったが、そのようにして、四匹死んだ。

毎日すっかり新しい水に取り替えるのはいけないのではないか、と夫がひとから聞いてきた。毎朝、夫が出勤したあと、妻はひと通り家事が片附くと、泥鰌のバケツの水の取り替えをするの

だった。忘れたことがなかった。水を減らして、泥鰌を他へ移しておき、角バケツも横洞の植木鉢もたわしで洗う。綺麗になった真白いバケツに新しい水を湛え、植木鉢を横洞になるように沈めて、泥鰌を滑り移す。一斉に跳ね泳ぐのが、澄みきった水にせいせいして如何にも嬉しがっているようで、妻は自分の気持まで爽々しくなるのだが、夫がひとから聞いてきたところによると、それは泥鰌どもは嬉しがって威勢がよくなるのではなさそうだった。新い水のなかへ突然に移され、呼吸困難に見舞われて苦しんでいるのだろうという。取り替えてやる水は、少くとも一晩は汲み置いた水でなければいけないのだった。それも、一日に替えるのは、三分の一程度までであればいけなかった。

そうなると、チーズをやっていたのでは、水が始終濁っている。日毎に濁ってくるほどである。餌を鰹節の粉や割いた煮干に変えてみたが、それでもかなり濁る。それが気になるので、何となく餌をやるのを見合わせる日がふえた。

しかし、そうなってから、泥鰌は死ななくなった。弱くて死ぬべきだったものは一応死んでしまった後だったのかもしれないが、少くとも餌はさほどやる必要はなさそうなことがわかった。で、一層餌をやらず、従って替える水の分量も一層少くてすむようになると、真白い合成樹脂の角バケツの中なのに、水に浸った部分一面に苔が緑色につきはじめた。植木鉢の横洞にもつきはじめた。泥鰌どもがその苔を突っついていることもあった。

「自給自足をやりはじめたらしいな。何もやらないほうがいいかもしれん」

と夫は言った。
以来、餌は一度もやらず、泥鰌は一匹も死んでいない。——
「わたしでも飼えるかしら」
と比佐子は言った。それを言うのは、二度目であった。
泥鰌の安否を訊ねる彼女に、尾形はあんまり死なないらしいと答えたあと、
「今、貰い手を探しているんだよ」
そう最初に言ったのだった。姉夫婦は東京を去らねばならなくなっていた。
「そんなふうに餌をやらなくてもよくて、水を少しずつ替えるだけなら、わたしにも飼えるかもしれないわね」
と比佐子は言った。「お姉さんのところでは、連れていらっしゃる気はないの?」
「そんなことまでする気はないらしいんだ。だけど、食べちゃう気にもなれないらしい」
二ヵ月近くも養ったので、泥鰌とはいえ、姉夫婦は情が湧いていた。彼等が今、考えている最後の処置は、どこかの池へでも戻してやることだという。貰い手を探しているとはいうものの、手もかからない代りに飼い甲斐もない、泥鰌の貰い手など、本気で探せるわけはないのである。姉の実家である、尾形の家でさえ、笑って相手にしていない。が、池へなりと戻すことにも、姉夫婦はまだ未練をもっていた。このまま大事に世話をすれば、一体どのくらい達者でいるのか、それを確かめたい気がなくならないからである。——貰ってみようと、比佐子は思った。泥鰌を

家で飼うと、一体どのくらい生きるものなのか、彼女も聞いたことがないのである。
泥鰌を引き取りに、今から一緒に行ってもいいけれど、相乗りするわけにもゆかないから、と表で自転車を指していう尾形と別れ、比佐子は翌日、彼の姉に電話しておいて、勤務先からの帰りに貰いに行った。彼女はまえに一度そこへ立ち寄ったことがある。それなのに、道に迷った。辿りついた時には、日は暮れてしまっていた。
「これですの」
と武子はベランダのガラス戸をあけて、比佐子を手招いた。比佐子は起ってゆき、その白い角バケツを覗いてみた。成程、水に浸っているところは、周囲一面が緑の苔である。そのうえ、暗くてよく見えない。水底で蠢く気配があったが、十匹近くも棲んでいる感じはしないのだった。夜は、大抵じっとしているのだ、と武子は尾形の話には出なかったことも言う。それから、尾形の話したことのなかには、少しちがっている部分のあることもわかった。
餌を入れても、その棲家をそうしてベランダに出しておくと、水はそれほど濁らないのである。太陽の力のせいにちがいない。そして又、太陽は、水中に苔を生じさせる力もあった。暖くなってバケツをベランダに出してやるようになってから、武子たちはそれを知ったのだった。
「あんたたち、よかったわね。いい方に貰っていただけて」
武子はそう言うと、「中の植木鉢は出しましょう。この子たち、途中で下敷きになるといけないから」

と透明袋をもってきた。それにも苔のついた植木鉢を取りだし、水が垂れきるのを待って、そこへ入れてくれる。

比佐子は用意してきた風呂敷を拡げた。泥鰌のバケツがそこへ移されてきた。燈の下で、植木鉢のなくなったバケツを覗くと、周囲は一面の苔でも、水は澄んでおり、その揺らぎにつれて幾匹もの泥鰌が居住いを直すように身動くのがわかる。尾形の言っていた尻尾の曲っているのはいるかしら、と比佐子はそれを訊こうと思った。が、武子の手が風呂敷の二角を持ちあげて、結びはじめた。うまくバケツの提げ手を出して、それを起こす。風呂敷の別の角を引っ張り、そこへ植木鉢の透明袋を入れてから、すっかり結び終えた。

「よろしくね」

と武子はその包みに、ちょっと手を添えて、比佐子に言ってみせた。

「隆はね、そんなに大事な泥鰌なら、ここを無償で貸して世話してもらえばいいなんて言うのよ。そんなことができるくらいなら苦労はないわ。いえ、泥鰌の苦労じゃあないのよ。泥鰌なんて、ね、あなたも飼ってみて、つまらなくなったら、いつでも捨てちゃってくだすっていいのよ」

と武子は言う。

「そんなことはしません」

と比佐子は答えたが、次にこう訊ねたのは、あとで考えると、全くただの雑談以上の気持が兆していたように思われる。「ここ、お貸しになるんですか？」

そして、それに対して、
「借りてくださる」
と答えた武子が、その時もし冗談らしく笑っていなければ、比佐子は多分もう少し別の応じ方をしていたにちがいない。だが、武子はそう言いながら、笑ったのである。それで、比佐子も、つい笑った。一戸建の家に、親きょうだいと暮らしている彼女の環境が、二人にそんな笑いを交わさせたらしい。
「毎月どのくらいのものかしら？」
と比佐子が訊いた時、それはもうどちらにとっても雑談にすぎなくなっていた。
「返済している分だけ引き受けてくださる方ならいいのよ」
そう答えて、武子が言ったのは、比佐子の給料の三分の一に少し足りない額であった。
「だけど、二年間……ま、二年ですわね」
「転勤ですか？」
と比佐子はその日はまだ帰宅していないらしい、武子の夫のことを言った。
「そうじゃあないのよ。弟、何も言わなかった？」
「いいえ」
「そう。泥鰌の話ばっかりだったのね」
と武子は笑った。「——いろいろと面倒なことになっていましてね。本当は泥鰌どころじゃあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com